

バルセロナ日本人学校での実践をととして

前バルセロナ日本人学校 教諭

福岡県中間市立中間中学校 教諭 権 藤 信 慶

キーワード：学校教育，国際理解教育，現地校交流

1. はじめに

スペイン第二の都市であるバルセロナはイベリア半島北東部にあり，地中海に面したカタルーニャ自治州の州都である。青森県とほぼ同緯度だが，温暖な地中海性気候のため，大変過ごしやすい環境にある。

その地理的な条件から，長い歴史の中で他国の影響を受けながら，独特の文化・伝統を培ってきた。ここに住む人は，スペイン人としてよりも「カタラン（カタルーニャ人）としての意識が高く，カタルーニャ語を公用語として用いている。

また，建築家のガウディや音楽家のカザルス，画家のピカソ，ミロ，ダリなど，数多くの天才芸術家を輩出している土地柄でもあり，彼らの作品はバルセロナのいたるところで目にすることができる。

現在，バルセロナの人口は約160万人で，そのうち日本人は約1,900人，進出している日本企業は160社以上を数える。

バルセロナ日本人学校が位置するサン・クガット市は，バルセロナの北部に位置し，近年，閑静な住宅地として発展している。本校はサン・クガット市近郊の丘陵地にあり，緑に囲まれた自然環境の中にある小規模校である。

2. 国際性豊かな児童生徒の育成

バルセロナ日本人学校では，芸術・文化の豊かなスペイン・カタルーニャの恵まれた環境を生かし，「国際性豊かな児童・生徒の育成」を目指して様々な教育活動を行っている。その一つが語学学習の充実である。そこで，平成19年度より，授業だけでなく学校生活の中で英語・スペイン語を使う場面を意図的に設け，コミュニケーション能力を身につける取り組みを始めた。

(1) 英会話・西会話

英会話・西会話の授業では従来イギリス人，スペイン人の6名の現地採用講師のみで行ってきたが児童・生徒の減少も影響し現地採用講師は2名へと削減された。そこで，平成19年度より，英会話・西会話の講師に日本人教員が加わり，分かりやすい授業実践に努めた。西会話は小学部1年より週2時間，小学部5・6年と中学部は週1時間，英会話は小学部3年より週1時間，小学部5・6年と中学部は週2時間学習している。もちろん，習熟度別の授業であり，きめ細かに一人ひとりにあった指導がなされている。また，学期に1度，英会話・西会話の発表会を行った。多くの教師や保護者に参観してもらうことで，子どもたちのモチベーションも随分と上がった。中学生の到達目標として，英検準2級以上の取得を目指し，3年生においては2級取得も達成し，成果を上げることができた。

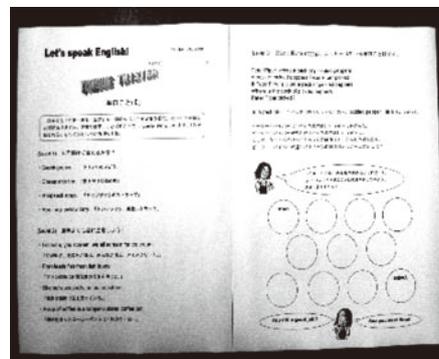
(2) 朝の活動

毎週火曜日の朝の活動の時間（約10分間）に様々な場面設定での会話の練習を始めた。もちろんプリントは手作りであり，児童・生徒が楽しく学ぶことができるよう工夫した。また，平成21年度より，学校での活動後，児童・

生徒は活動で使用したプリントを家へ持ち帰り、保護者と会話の練習を行うといった取り組みを導入した。保護者との活動後、児童・生徒は保護者からサインをもらい、プリントを回収し、コメントをつけて返却するといった一連の流れであった。すると、それまで低かった英語やスペイン語に対する学校評価の数値を上げることができた。

(3) 委員会活動

朝の活動に加えて、国際親善委員会を中心とした委員会活動の充実を図った。月に1度、授業間の時間(15分)に英語、スペイン語を使って小1～中3まで楽しめる簡単なゲームやインタビュー活動を行い、できる限り既習の言語を使う機会を多く作ってきた。全教職員が英語とスペイン語の会話学習にかかわることで、子どもたちのコミュニケーション能力の向上に取り組めた。また、放送委員会では、日本語に加えて英語やスペイン語でもアナウンスする機会を多く設けた。また、会話の例を紹介するなどの取り組みを積極的に進めてきた。



朝の活動でのプリント例 (A4両面)

(4) 現地交流

① バルセロナ市民マラソン

スペインの大型チェーンデパート「コルテ・イングレス」主催のマラソン大会が毎年5月に開催される。国際親善委員会を中心に呼びかけを行っている。約半数となる40名の児童・生徒、全職員とその家族が参加した。バルセロナオリンピック競技場を通るなど約11キロメートルを走ったり、歩いたりして汗をかき、現地の行事に参加した。

② 宿泊学習

中学部では現地の民間宿泊施設にて7月に2泊3日の宿泊学習を行っている。指導は現地のモニター(指導員)がスペイン語で行う。場所はピレネー山脈近くの山、フランス国境近くの地中海というように、海と山の活動を隔年で実施し、様々な自然体験ができるようにしている。自然環境を主とした現地理解としては、大きなウェイトを占める取り組みである。活動では、実行委員が中心となり、宿泊学習のテーマや活動全般についてのルール、モニターへのお礼、生徒企画でのゲームの内容等を決めた。極力多くの仲間と接し、活動できるよう、活動班を2パターン、生活班(就寝)、自炊活動は学年毎で実施するように決定した。

③ カルナバル

総務委員会の呼びかけで、スペインカルナバルの時期に、カルナバル週間を設けて実施している。「月曜日はかぶりもの、火曜日は赤いもの・・・」というように、曜日によってテーマを決め、児童・生徒だけでなく、職員も参加した。様々な格好で登校し、この週間のときは一日中そのままの格好でよいために、お互いの衣装の場にもなり、楽しい雰囲気の中で学校生活を送ることができた。

④ 職業体験学習

ねらいは「働く喜びや苦勞を知り、将来に向けた職業観の形成をはかる」ことである。バルセロナ市内および近郊の日系企業に職業体験学習の協力を求め、実施している。協力していただいた日本企業各社の規模や沿革、仕事内容について事前調査したり、質問事項を考えたりして、生徒一人ひとりが個人テーマを持って、各企業に向かう。体験後は各グループでパワーポイントを使い、まとめを行う。1月の後半に、保護者やお世話になった企業の方々を招いて発表会を行った。

⑤ もちつき大会

バルセロナ日本人学校の運営母体である日本企業の組織「水曜会」主催のもちつき大会が毎年1月に実施されている。小学4年生は事前にポスター作製，当日，小学5・6年生は太鼓演奏，中学部は習字で名前を書く名前書きボランティアとして活躍している。日本人のみならず，スペイン人の一般のお客さんも多数参加し，もちつき以上に，太鼓演奏や習字による名前書き（スペイン人の名前を漢字で書く）は大好評であった。

⑦ その他

芸術・文化に触れる具体的な体験活動としては，サグラダ・ファミリア教会などの世界遺産を見学しながらの写生会（小学部1・2年）やピカソ美術館をはじめとする多くの文化施設見学（中学部）などを実施している。また，スペイン人講師による伝統舞踊（サルダーナ，セビジャーナス）や家庭料理（ガスパチョ，トルティージャ）の講習会等も行い，保護者ボランティアの協力を得て，地域・家庭を巻き込みながら楽しく現地理解学習を推進している。

3. 現地校交流

小学部は現地のイシドロ校とマラガイ校，中学部ではアンジェレッタ校との交流活動を行ってきた。アンジェレッタ校は日本人学校と同じサン・クガット市に位置している。また，小学部で交流活動のあるマラガイ校の多くの児童がアンジェレッタ校に通学することになるため，交流活動も盛んに行われてきた。しかし，近年の教育改革により，授業数の確保や教師の交流に対してのモチベーションが低くなった等の点から交流活動を行うことができなくなった。そこで，交流相手校を約半年間かけて探していったのだが，サダコ学園が交流活動の相手として決定した。サダコ学園は広島県原爆の後遺症で亡くなった佐々木貞子さんから名付けられている私立学校である。現地校との交流の活動のねらいは「日本文化の紹介や交流を通して，積極的に自分を表現する態度を養う」「相手に分かりやすく伝える手だてを考え，工夫する態度を養う」「現地校の生徒と進んでふれあおうとする態度を養う」であり，国際性豊かで国際人を自覚する生徒が育まれていくものと考えている。

(1) サダコ校来校

初めて交流活動を行うこともあり，日本のこと，学校のことをサダコ校の生徒により深く知ってもらうために，実行委員会を中心となり，パワーポイントを使っての紹介を行った。その後，「書道」「剣道」「茶道」の3グループに分かれて交流を深めた。スペインの生徒は明るく，伸び伸びとしている。礼儀正しくじっとしている日本人生徒と，よく語り，よく笑う明朗快活なスペイン人生徒との交流は，見ているだけでも楽しかった。日本の伝統文化交流後は，軽食活動を行った。手巻き寿司の材料を朝から準備し，作り方や食べ方を教えながら日本食を紹介した。「スペイン語や英語をたくさん使い，積極的に交流する」ことを目標に置き，生徒たちの会話も更に楽しく弾んだようだ。

(2) サダコ校訪問

サダコ校来校の約1ヶ月後，サダコ校を訪問させてもらった。開会式では，日本人学校同様，パワーポイントによる学校紹介，カタルーニャ地方の歴史等の紹介を受けた。校長先生の挨拶，生徒の説明は全て，流暢な英語で行われた。その後，中庭へと出て行き，バストーンズの踊りを学んだ。最初は久しぶりの対面で緊張し，表情が固かったが，時間が経つにつれすっかりうち解け，笑顔が見られるようになった。休憩時間をはさんで，日本人学校の生徒は音楽・体育・英語の授



サダコ校の屋上にて記念撮影

業にそれぞれ参加させてもらった。英語は中学3年生の授業に参加したが、日本の高校2年生程度の内容を学習していたので、生徒はかなり困惑していたが、サダコ校の生徒たちの援助もあり、楽しそうに授業を受けていた。生徒達は英語の必要性を感じるとともに、学習する意義を再認識し、やる気を出すようになったことは、とても良い経験になったと感じている。授業を受講した後は軽食活動があり、カタルーニャ地方の伝統的な食べ物「ボカディージョ」をご馳走になった。最後の活動としては、サダコ校の生徒達が考えたカタルーニャ地方の遊びを学び、それぞれの文化や習慣について触れることができ、有意義な時間を過ごした。

4. 終わりに

真っ青な空ときらめく太陽の光が降り注ぐバルセロナ日本人学校に赴任し、各都道府県から赴任された先生方やご家族に出会えたことに感謝したい。また、日本から遠く離れた土地で、明るく元気に頑張る児童・生徒たちの教育に携わることができたのは、私の財産である。今後は、バルセロナおよびヨーロッパでの人々の考え方、生活習慣、伝統・文化、歴史などを生徒たちに伝え、国際社会を生き抜く生徒の育成に努めていこうと考えている。